

遠藤周作・「沈黙」について

黒田美保子

「どんな人間にも、どんな時にも、二つの祈願があつて、一つは神に向い、一つはサタンに向う。神への祈願は……向上への希求である。サタンへの祈願は……下降への喜びである」とボードレールは言っている。この言葉を感覚的に理解する事は我々日本人には無理であるかも知れない。何故なら絶対的なもの、つまりこの場合の神の存在というものを我々は常に強烈に意識するということがないからである。他を全て排斥して絶対の善を求める。その反動として悪を求めるのであるから。このボードレールの言葉はキリスト教的人間観を極めて端的に——けれど文学的に表現した言葉である。神とサタンとの中間者、この相反する力に引き裂かれた存在として人間というものが考えられている。そしてこうした視点から人間を眺めるのが一般にキリスト教作家の眼なのである。

日本に於いてこのキリスト教徒の目を持って真向から文学に取り組んだのはおそらく遠藤周作が初めてであろう。彼は日本の文壇に椎名麟三・野間宏・三島由起夫・武田泰淳等第一次戦後派と呼ばれる観念的な小説世界を持つ作家集団が登場し、一応の結実をみた昭和二十七八〜二十九年頃、戦後派とは異った文学世界を持った△第三の新人▽と

呼ばれる作家集団の一人として登場するのである。

この一団には第一次戦後派に見られる様な優等生・英雄的イメージはなく、むしろ劣等生・脱落的なイメージの濃い世界が特色づけられている。それは彼等の世代があゝの戦争を実践し、その中を生き抜き華々しく復員して来たのではなく、召集はされたが何もせず戦いを終えて帰って来たという世代であり、青春時代を常に戦争という絶対的なものによって圧迫され続け、押し迫って来る他者を意識せざるを得ない状況の中で時を過ごして来た人々であるからであろう。△第三の新人▽と呼ばれる一団には遠藤周作の他に安岡章太郎・吉行淳之介・阿川弘之・庄野潤三等がいる。

遠藤周作は昭和二十二年十二月エッセイ『神々と神と』を角川書店刊行の『四季』に、評論『カトリック作家の問題』を『三田文学』に発表した。これがものを書き、発表した最初である。この時『四季』の「巻末言」に神西清は「遠藤周作さんは三田文学の若い真摯なカトリックの学徒である。『神々と神と』というエッセイは、詩人リルケと『花あしび』の作者との対決を深くみずからの内部の問題としてえぐるうとしたものであるが、このテーマはさらにひろく一神論と汎神

論をめぐる永遠の問題へまで転調されてゆく必然をもつ……。」と書いている。この文によって文壇の一角に始めてその名を録したと同時に、ハカトリックの学徒Vとしてハ一神論と汎神論をめぐる永遠の問題Vをハみずからの内部の問題としてえぐるVことを望まれ、遠藤文学の究極的課題をそこに求めるように運命づけられたのである。以後、遠藤周作は西欧カトリック作家の影響を受けながら数多くの評論・エッセイを発表して行った。

しかし、何と言っても文壇に於て、遠藤周作という名を不動のものとしたのは、小説『白い人』（『近代文学』五・六月号掲載）によって第三十三回（昭和三十年上半期）芥川賞を受賞した昭和三十年頃からであろう。

遠藤周作は、キリスト教作家としてハ一神論と汎神論をめぐる永遠の問題Vをハみずからの内部の問題としてえぐるVことを生涯の課題としたわけであるが、ここに至るまでの彼の生い立ちを探ってみよう。

遠藤周作（一九二三―）は、大正十二年三月二十七日東京市巢鴨で安田銀行に勤める父遠藤常久とまだ上野音楽学校ヴァイオリン科の学生であった、母郁子の二男として生まれた二歳年上の兄正介がいた。父はハ「平凡が一番合せだ、波瀾のないのが一番合せだ」そのような意味のことVをいつも口にし、ハ小心で安全な人生のアスファルト道を歩きVたいと願う男であった。この父に対し母は、ハ何時間も、ただ一つの旋律を繰り返しかえし繰り返しかえし弾Vき、ハ石のようで、眼だけが虚空の一点に注がれ、その虚空の一点の中に自分の探し求めるたった一つの音を掴みだそうとするVような激しく厳しい姿勢が芸術のみでなく、日々の生活にも現われるような、父とは対照的な生き方を

る女性の様であった。遠藤周作は後にこの母から多大な影響を受けることとなるのである。

大正十五年父の転勤で満州の大連市大広場小学校に入学、三年生の頃から両親が不和になり、子供心にもそれを感じ、悲しい思いをした。

昭和八年には両親の離婚で母と兄と共に神戸の伯母を頼って帰国、母の命令で教会に通うようになり、一年後ハ無自覚に「信じます」と答えVクリスチャンの洗礼名ポールを受けた。これが後にハ合わない服を着せられVて悩み続けることになる彼の人生を決定づけた事件であった。

昭和十八年、慶応義塾大学文学部予科に入学したが、医学部に入学しなかった事で家を勘当され、信濃町にある基督教生寮に入る。そこで舎監をしていた哲学者の吉満義彦の影響でジャック・マリタンを、友人松井慶訓の影響でライナー・マリア・リルケを読むようになった。キリスト教国を敵国としたこの時代をキリスト教徒として生活した彼は「日本が戦争をしているのに、お前は敵国宗教の信奉者だ」とか、「天皇と神とどちらを尊敬しているのだ」と言った屈辱的な言葉を浴びせられたのだった。傷つき易い青年の心にこの時初めて日本人であるキリスト教徒として、日本とキリスト教に関する問題が頭をもたげて来たに相違ない。

昭和二十年には肋膜炎の為召集延期になり、入隊しないままに終戦を迎えた。予科時代下北沢の古本屋で買った佐藤朔の著書『フランス文学の潮流』がきっかけとなり、当時佐藤朔が講師をしていた慶応義塾大学仏文科に進んだ。この時代の事を遠藤周作は『佐藤朔先生』の中で「もし先生が仏文科の講師でなかったならば、ぼくは二十世紀のフランスカトリック文学も勉強せず、モーリヤックの愛読者ともならな

すかっただろう」と書いてある。

昭和二十三年には初めてエッセイ『神々と神と』を発表、以後カトリック者の立場から数多くの評論・エッセイを発表した。こうして批評家遠藤周作の名を高めて行った。

彼は最初批評家として活躍していたのであるが、その彼を小説家に至らしめるきっかけを作ったのが、この昭和二十五年のフランス留学体験である。留学と言っても現代のような華々しいものではなく、戦犯国日本の留学生達は四等船室で荷物同様に扱われ、上陸も許されないうような厳しく、苦しい船旅であった。

一ヶ月後船はマルセイユに到着、遠藤周作はフランス語とフランスの生活様式を学ぶ為にルーアンの建築家ロビンヌ家に預けられた。

寄港地ごとに目にした生々しい戦争の傷痕は、彼に戦争犯罪国日本の国民であるという意識を起こさせたであろうし、また同時に、彼はこれから自分がぶつかなければならない、そして彼一人が体当たりしてもピクリともしない西欧と日本というとても厚く厚い壁をひしひしと感じたことだろう。

そして彼はこの留学で今まで意識した事もない自分の黄色い肌の色が、この壁をさらに厚く塗りあげている一因である事を知ったのだ。生まれもった肌の色が西欧人の軽蔑の対象であろうとは……。このどうしようもない事実の前にもすれば卑屈になりがちである日本人留学生に対し、彼は常にフランス人へのコンプレックスを自ら取り除こうとする姿勢を保ち、フランスという国の異国情緒におぼれてしまふ事無く、その奥を見極める目を持って批判すべきものには、常に仮借なきまでに批判をぶつけて行くのだった。

彼はあるエッセイの中で「もともと私は大学の研究室に残るつもり

で渡仏して来たのだが、渡仏の船の中で次第に心境の変化をきたし、小説を書きたいという気持ちになって来たのである。そういう意味で日本人もほとんど居らず、そして戦争犯罪国民である私にとって、リヨンの寒い孤独な生活は小説家となる為にかなり役立つ様な気がする」と言っている。彼の住んだリヨンは保守的な町であり、未だに中世を思わせる黒ミサが秘かに行われていた、黒ミサの背後に隠された強烈な神への反抗、それは常に強く神という絶対者を意識し、自分を自制して生きる西欧人へのみ存在するもので、日本人にはこれ程強烈な下降への悦びという意識は存在しないだろう。この一神論の世界と汎神論的世界との距離を感じた時、汎神的風土に育った一神教（キリスト教）の信者遠藤周作は、そこに自分が生涯を費しても追求しなければならぬ問題を見出したのであろう。

遠藤周作は留学半年前の昭和二十五年一月に『近代文学』に掲載されたエッセイ『フランソワ・モーリヤック』の中で、作家として生き生きとした真の人間を描き出す為には作中人物の罪や悪を凝視しなければならぬが、それをする時作中人物の心情に共感する事なしには書けないので、その汚れた部分と慣れ合う危険性が生ずる。この事はカトリック者としての純潔を汚す恐れがあるのに、何故罪や悪さえも直視せざるを得ない人間凝視の眼を捨てなかつたのかという問いをモーリヤックに投げ掛けている。

そして半年後の留学によって彼は、キリスト教徒であると同時に作家であるモーリヤックには、作家であるという誠実を守る為に人間を凝視するという宿業の眼を持って人間を眺める義務があり、自らが、ただ美しきもの善きもの、しあわせのみを夢見る程素直な生きものではない人間の真の姿を体験し、その中から再び信仰を取り戻すより道

が無かったという事を知ったのだった。この作家としての人間凝視の義務に対する考え方はモーリヤック的な視点の理解と同時に彼自身の作品を書く上での基調をも成して行くのである。

二年余に渡る異国での生活で彼は胸を病んだ。苦難に満ちた生活の中で壁の厚さを感じ、その壁の前に挫折し血を吐いた彼の姿はそのまま長編小説『留学』の主人公の姿に投影されていると見る事ができる。

そしてこの挫折が彼の小説を生み出す基盤になって行ったとも考えられるのである。この体験から生み出された小説の最初が白人の中に投げ込まれた黄色人種の劣等意識を強烈に描き出した『アデンまで』である。それから芥川賞受賞作品『白い人』続いて『黄色い人』『青い小さな葡萄』そして第五回新潮社文学賞、第十二回毎日出版文化賞作品『海と毒薬』等を精力的に書き進め、その作品主題も西欧と日本の比較から神無き日本人の姿というように高められて行った。

そして三十四年夫人を伴い再び西欧へ、そこで風邪を引いたのが原因で結核を再発、三年近い入院生活を余儀なくされてしまう。この闘病生活を期に、彼の作品の視点に変化が表われた。作中人物を突き離し高みから見下ろす形で人間の弱さ、エゴイズムを描いていたのが、あくまでも作中人物を暖かい眼差で見守りながら、読者にも共感を覚えさせる様な人間の弱さを描く様になったのである。

一体何が遠藤周作にこの変化をもたらしたのだろうか、やはりそれは長い間の入院生活であるだろう。普段どんなに健康な人間であっても病気になる心細くなるものである。彼自身も語っている様に手術中心臓が何秒か停止してしまつたV程危険な手術を三度も受け、死と隣合わせになった経験、日々繰り返される人間の生死のドラマ、病院という一種独特な世界での体験が彼に弱者への共感的視点を持たせ

たのであろう。

しかし入院生活だけが彼の視点を変えたのではない。この頃遠藤周作は人間凝視の視点も彼の作品にもたらす効果について改めて問い直していたのである。日本で初めてカトリック作家としての立場から物を書き始めた彼は、西欧のカトリック作家であるフランソワモーリヤックやジュリアン・グリーンからその手法を学んだ。とりわけモーリヤックの『テレーズ・デスケルウ』で使われているA非情の凝視Vに共感し、その手法を用いた。『海と毒薬』がそれである。この作品の様に様々な視点から作中人物を描き出すという手法は、それぞれの人間のエゴイズムを浮び上がらせる為には極めて効果的で、彼が神無き人間の悲惨を描き出そうとしていた時までは大きな効果を上げていた。しかし『火山』に於てその手法はあまり効果的であるとは言えなかった。ヨーロッパのカトリック作家はその手法で、読者が例えキリスト教徒でなくても、キリスト教の伝統のある世界で生活している為たやすくキリスト教的雰囲気に取り込まれる。けれど日本人にはそれが無い。『火山』での不成功から西欧カトリック作家の手法の模倣では限界があるという事を実感し、様な方法を用いて作中人物への視点の当て方を模索していた時期であったのだ。

退院後の作品『留学』の主人公田中に対し我々は、彼の弱さを見つけられても嫌悪感を感じる事がない。むしろ同情や親しみを禁じえない。これこそが彼の入院生活をもたらした主人公の弱さの上に自らの弱さを重ね合わせて描くという視点の変化の成果なのである。この作品の中で作者は、時代が異つた留学生の姿を描き、主人公が信徒や教会から善意の夢を押しつけられ、いつも「もう沢山だ放っておいてくれ、日本人にあなた達の考えを押しつけななくてくれ」と叫びたい衝動

にかられているという、ヨーロッパ人の拒絶を描き、それを通じ日本とヨーロッパの距離感をクローズアップしている。

注目しなければならぬのは、昭和四十一年三月『群像』に発表されたものである。この作品で単行本化された時省かれた部分を読む事ができる。第二章の後の削られた部分に、胸を病んで帰国を余儀なくされた工藤が退院し、妻と子を連れて長崎に旅する場面がある。その中で工藤は三百年前ここであった風景を思い浮かべ、自分がともかく信者として扱われるのは、あの時代に生まれなかった為だけであり、ヌキヤラやフェレイラ達も今の日本に来ていたなら信者達から尊敬される様な立派な神父であり得たに違いないと考えるのである。ここにその後書かれることになる『沈黙』の主題がはっきりと示されている事に気付かされる。さらにこの省かれた部分に△……しかしこの夕靄の街道を荒木トマスや沢山の転び信徒が工藤と肩を並べて歩いている▽というのがあつた。殆ど自分自身に近い形で書かれた主人公にこういう立場をとらせたという事から、彼が『沈黙』を書き進めていた時自分自身の位置を、ロドリゴやフェレイラ、そしてキチジロー等の転び者と同列に置いてたのであろうという事が推察できるのである。『留学』を書き終え昭和四十一年三月新潮社から純文学書下ろし特別作品のかたちで、今までのテーマに一区切りつける意味を込めて『沈黙』を発表した。

『沈黙』執筆のきっかけは先に述べた入院生活で死と向き合いながら、自分とキリスト教との関係をはっきりさせておかなければならぬという義務感と焦燥感にかられた事、そしてもう一つ遠因となつた事に彼が子供の頃から指導を受け、深い影響を受けた神父のつまづきがある。その神父は終戦後の混乱期の中で女性と問題を起こして背教

者となつたのである。けれども彼は他の人々がした様にこの神父に軽蔑の眼差を向ける事はしなかつた。むしろ同情的でこの事件にその後永い間関心をもつていた。

けれど『沈黙』の作者自ら書いている様に直接の動機となつたのは、退院後初めて長崎へ旅した時十六番館で見た一枚の踏絵である。踏絵には木の杵がはめられていて、そこに黒ずんだ指痕がくっきり残されていたのだつた。それを見た作家の心には、自らの信念を肉体的な恐怖に負けて貫き通す事が出来なかつた弱い人間達がどういふ気持ちで踏絵に足を掛け、その後の様な人生を送つたかという疑問がわき始めた。そして多くのキリシタン資料を紐解いてみた。けれど汗牛充棟ただならぬ研究書は例外なく殉教者の為のものであり転び者達は教会の汚点として黙殺されていたのである。この「臭いものには蓋」的な歴史に反撥して『青い小さな葡萄』以来のテーマである「神の沈黙」を「歴史に沈黙させられた」側から書こうとしたのである。

△子供の時、キリスト教の洗礼を受けさせられた。気が付くといつの間にか身体に合わぬ洋服を着せられていた▽その△ダブダブの洋服▽を何度となく脱ぎ捨てようとしたが、その中に無視できないものを見て、とうとう脱ぎ捨てる事ができず、しだいに△自分の身に合うように作りかえ▽△身に合った和服に仕立て直△して行つた。その仕立て直した和服がつまり『沈黙』である。カトリックとは普通の意である。それだけに仕立て直された遠藤周作のキリスト教は△多くの信者の怒りを買う▽△いままで寛大だつた多くの神父達を悲しませる▽結果となり、多くの問題を世に提したのだつた。

世の読者の関心を最も集めた問題として挙げねばならないものは、もし神が全能であるなら神は何故信者が多くの苦難にさらされている

時、それを放置し、沈黙しているかという神の存在に関する問い掛けであると思う。

それは日本にフェレイラの消息を求めて渡って来たロドリゴの手紙の中、キチジローに売られ捕われの身になった時、そして井上筑後守等から、ロドリゴが転べば他の多くの信者を救ってやると二者択一を迫られる場面など、小説のやまの部分に必ずと言っていい程に提示されている。

この問題に対して作品の中で遠藤周作はこう答えている。つまり、ロドリゴがついに踏絵を踏もうとする時神に「踏むがいい、お前の足の痛みをこの私が一番良く知っている。踏むがいい、私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前達の痛みを分つため十字架を背負ったのだ」と言わしめ、その後の転びバレン岡田三右衛門の回想の中には、「踏むがいいと哀しそうな眼差しは私に言った。……」主よ、あなたがいつも沈黙していられるのを恨んでいました。「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」この部分が、ここで我々読者は作者が神は苦しむ信徒を見てなお沈黙しているのではなく、彼にことばを与えたもうのだと断言していると見る事ができよう。

この作品の最大のテーマである神の存在に対し彼はこのような方法で神を示したのである。しかし、この点にはカトリック信者や教会から多くの批判が寄せられた。その批判とは如何なるものであろうか。

キリスト教は啓示宗教、つまり神の子イエスが自らを人間に向って顕示し、それによって人間を救おうとする宗教なのである。この点を考えれば神が人間に語るといふ宗教であると言える。その点でこの小説に異論はないのである。しかしその語るといふ事の方法に問題があ

るのである。作者は読者に神が語り掛けたという認識を持たせた。神はあくでも神でなければならぬ。神は我々人間が存在する日常に存在してはならないのである。それは何もキリスト教に限った事ではない。宗教の世界には越える事のできない限界線というものが存在する。神に語らせたという事はその限界を越えた行為であり、普遍であるべきカトリックを日本のカトリック、つまり特殊なカトリックにする行為である。神はロドリゴが踏絵を踏んでしまつてからその足の痛みに対し、あくまでも沈黙を守り、かつ暖かい眼差で見守っている。そうあるべきであった。何故なら沈黙は神の超越性を示す行為だからである、と言うもので、これらはカトリック側から出た極めて正統的かつ神学的な批判である様に思われる。

それでは遠藤周作は洗礼を受けていながらカトリックの教理を歪めてしまった批判すべきカトリック教徒なのであろうか。

いや、彼はあるエッセイの中で「神は多くの場合、われわれには具体的に語り給わぬからです。われわれは神の存在をこの眼で見たい。神の奇蹟をこの眼で見たい。われわれの祈りに神が答え給うのをこの耳で聞きたい。だが多くの場合、いや殆んど神は信者にすら、沈黙をまもっていられます。」と言っているのであるから、彼の中に永遠に沈黙し給うている神が存在する事は確かだ。その彼が敢えて神に語りせたというのであるから、読者としてはそこに作者の言わんとする何かを感じなければならぬと思うのである。

まず多くの一般読者を想定し、この小説のクライマックス部分に於ける効果について考えた時、そこに神に語らせる必要があったのだと思う。そしてもう一つ、ロドリゴが苦しんでいる時に語られた神とフェレイラが転ぶ時彼に向って語られたであろう神とが同じ神であり、

さらにその神がキリスト教徒の全てに共通する神であろうかという事である。私はキリスト教の事はよくわからないけれども宗教つまり信仰というものはキリスト教、仏教とそれぞれ独自の方向を持っていると思うが、その中にある個々人はその方向性のある大きな矢印の中で、又それぞれの方向に向かって矢印を持っていると思うのである。

従ってこの小説でロドリゴに語った神はロドリゴの中にある神で、フレイラの神ではなく、キチジローの神でもないと思うのである。そしてこの神に対する考え方は作者のそれに同じで、ここに登場する神は遠藤周作が長い信仰生活の中で築いた彼自身の内に存在する神であると言えると思う。永遠に沈黙し給うべき神を語らせたという事から、この「語る」という行為が小説の本質ではないと判断できる。思うに遠藤周作はこの事で、神への愛や日々の信仰がああいった絶体絶命の境地に立った時に報われるのであるという事、そしてさらにこの事を通して、最終的な信仰が個人のもので、そこにはその人間の自由が存在するのであるという事を強調している様に思うのである。

歴史は例外なく殉教者に栄光を与え、転んだ者達には、それが如何なる理由であったかという事を語る隙さえ与えてはいない。殉教者のみが華々しくもてはやされ、後世まで伝えられているけれど、はたして殉教のみが真に神に従う態度であるのか、ロドリゴの行為は宣教師として本当に恥づべき行為であったのかという疑問が考えられる。

今すこし「殉教」について考えてみたい。殉教には二つの意味があると思う。一つはキリストに従うという行為が真実で、その純粋な心からする死の行為、そしてもう一つは殉教という言葉に酔って、自己の功績としてその行為を誇ろうとする英雄的行為の殉教である。反対に「転び」について言うと、一つは迫害を恐れ、自己の安全を期するた

めに安易に教えを捨てる転び、それと外面的には背教者となりながら、内面的には神の声を聞き、友の為になお生き続けるという心と反対の転びという二つである。

ロドリゴが奉行所の役人に「お前が転べば今穴の中で苦しんでいる百姓達をあゝの地獄の苦しみから救ってやろう」と言われた時に、それを拒み華々しく歩んで行ったとしたらどうだろう。教会ではその行為を誉め讃えるであろうし、迫害の苦しみに疲れきっている多くの信者の中には、きっと光をさし込んだだろう。だがその時ロドリゴ一人の栄光の為に多くの農民の命が消えるという事を一体どれだけの人間が考えるだろうか。ロドリゴがああの時、殉教という栄光を手に入れようとしたのであったら、同時に彼はまちがいなく殺人者になっていたのだから。

私はロドリゴの転びは、先に述べた二つのうちの後者の転びだと思ふ。キリスト教に有名な「汝の隣人を愛せよ」という言葉がある。迫害という特殊な状況の中では神を愛する事と、この隣人を愛する事とは対立していると思われる。殉教という事は積極的に苦難を受けて神に従う行為とされている。けれどロドリゴの様に特殊な場合に於ては、神の為に死ぬよりも隣人の為に自らは呪われて、地獄に落ちてもそれでよいと思うし、その後ロドリゴはこの人の為なら死ぬるとまで思った神の顔を自分のこの足で汚したという苦しみにまわりつかれながら生きて行くのであるから、これこそが神に従って生きる生き方と言っても過言ではないと思う。つまりこの状況に於ては転ぶ事即ち殉教の死を遂げる行為だと思ふ。現にロドリゴは転んだ後司祭としての権利を剝脱され、信者や教会からは汚点とされるけれど今までとは違った形で神を得たのであるから、作者遠藤も黙殺されたこれらの転

び者を歴史の中から引き出し言葉を与えたかったに違いない。

遠藤周作の生涯のテーマは汎神論対一神論の世界、日本と西欧との距離といった問題である。これらの問いは処女作品よりあらゆる方向で追求されて来たが、『沈黙』はその集約的作品であると言えよう。私が特に注目したのは、ロドリゴが踏絵を前にしていると井上筑後守が「形だけで良いから神に足掛けよ」と言う場面である。

ここでの井上の言葉には救済の気持ちが含まれていると思われるけれど、この言葉に対しロドリゴは益々苦しんでいるのである。ここで日本の寛容性と西欧の不寛容の文化について考えさせられる。かつてガリレオ・ガリレイが地動説を唱えた時、教会はそれを異常なまでに否定した。それは天地創造説というキリスト教の教理が覆えさされてしまうからに他ならなかった。一つのことを絶対にするまで高めるため、例え正しい事であっても他を排斥する様な、西欧はそんな不寛容の世界である。この寛容・不寛容の文化の違いがこの場面に大きくクローズアップされていると思う。

不寛容の文化世界であるヨーロッパに育ったロドリゴにとって「形だけ」という理論はあり得ないのであり、形式と内容という両理論を持つ井上の救済の言葉であっても、それが即背教であり、神に対する許すべからざる行為であったのだと思う。

よく我々は「形だけ」という言葉を口にする。形だけであったならまあいいだろうという気持ちである。そしてその形式と内容の間には多くの矛盾があるけれど、日々我々はそれに対して神経を尖らせてはいない。ここに寛容性を備えた日本の文化のかおりがする。

形式と内容の二つの理論を持ち、ロドリゴも当然その理論を持つものと考えている井上であるから、ロドリゴは本心では神を捨てていな

い事を知っているであろう。だがなお彼はロドリゴに「形だけ」踏む事を勧めた。井上はそれでも良かったのだろうかと疑問に思う。

しかし教会は一度でも踏絵に足を掛けた者を許しはしない。つまりロドリゴは社会的に葬むられてしまう。そして布教活動はできなくなるし、信者に与える心理的影響も大きかったから、それで良かったのだと思う。井上は今までも多くの信者達の不屈の態度を見て来て、人間の内面まで動かす事の困難さを十分知っていたのだと思うし、かつて自分も帰依していたキリスト教に対し、そこまでする気持ちも持ち合わせていなかったのではないだろうかとも考えられる。

井上の事を考えていると彼と一緒にロドリゴに転びを勧めたロドリゴのかつての師フェレイラこと沢野忠庵が思い起こされる。彼がロドリゴに踏絵を勧める時、西洋人である故そこに救済の心理は読み取れない。ではフェレイラは既にかつて若い神学者や信者から立派な師とあがめられていたフェレイラではなくなってしまうのだろうか。

人間は本当に心から唯一のものを信じ、そのみに頼って生きて行けるものではないと思う。強く信じたいと思う意志に対し、そこには常に強い不安がある。「神は本当に存在するのか」という言葉は信仰に生きる誰もが常に持つ不安であると思うけれど、それは同時に信仰に生きる者としては絶対に口にしてはならない言葉であった。けれどフェレイラは今、転んだ者として（自分では今までと違う形で神を愛していたが）今までも容易にその疑問を口にする事ができたのだと思われる。そしてこの疑問はロドリゴも苦しい潜伏生活や信者に課せられた苦難をこの目で見るという体験を通して感じていたものであっただけに大きく心を動かされる。フェレイラにもこのロドリゴの心の揺らぎは手に取るように感じられただろうと思う。何故なら彼自身そ

ういう体験をしていたからだ。

この様にしてロドリゴの心の内の疑問、不安を大きくする事で彼は自分が教会から追放されながら、心の中では今までと違う、そして今までに増して身近な存在としての神を意識している。けれども意識とは全く反対に今の自分はこうして、この苦しみの原因とも言える日本人奉行の為に働いているという苦しみや、あの呪わしい過去の出来事に対するヒステリックな気持ちを無意識の中ではあるけれども慰めようとしているのではないかと思う。

私はこういうフェレイラにかつての姿にも増して人間味を感じる。何もかも自分の中に押し込めて生きるよりも、時にはどうしようもない憤りを何かにぶつけて生きる生き方にこそ人間らしさが現れていると思う。司祭は神ではなく我々と同じ人間なのだから。

そしてもう一つ、このロドリゴとフェレイラの会話の部分に留学時代から彼が傾倒していたマルキ・ド・サドの影響を見る事ができる。サドの影響を受けた彼の文学には常に英雄主義の否定が見られる。この作品の中ではフェレイラが△自分の救い▽を大切にし、百姓の命が救われるにもかかわらず△彼等のために教会を裏切ること▽を恐ろしがり、△教金の汚点となる▽事を恐ろしがり、△殉教すること▽を恐ろし否定している。そしてロドリゴは殉教の苦痛に耐える行為の裏には常に信者があり、それを意識すればする程自分が英雄になって行くという事を否定し得なかった。そして彼もまた転んで行くのである。遠藤文学の根底に英雄主義の否定があると述べたが、それはとりもなおさず、非英雄主義の肯定という事なのである。その事は先に述べた様に転び者となったロドリゴがより身近に神を意識する様になり、神に見放されたのではなかったという事でもわかる。

ではロドリゴを売り、役人にほんの少しでも驚かされるとすぐ踏絵を踏んでしまう、けれど逃げてしまわず未練がましくロドリゴの身辺につきまといっている小心者キチジローの如き人間は神に救われるだろうか。非英雄として肯定されているだろうか。

キチジローに関する描写を少し探ってみても、キチジローがいかに英雄とは程遠い人物であるかがわかる。けれど『沈黙』の中でフェレイラやロドリゴ、そして井上筑後守など多くの登場人物がいる中で、このキチジローだけが本当に生き生きと描かれている。キチジローに対し、弱い人間に対し作者の愛情が最も多く注がれているからである。ここに弱者を常に暖かく見守っている遠藤周作の眼が感じられる。それは彼自身がキチジローと同列に位置しているという事であるだろうし、主人公の弱さの上に自分の弱さを重ね合わせて描くという入院生活以降の視点の当て方の変化でもある。つまり作者がこの作品を通して一番言いたかった事は、このキチジローという弱さゆえ辛うじて生きのびて来た弱者の人生ではなかったろうか。そして『沈黙』は弱者の文学ではなかったろうか。

彼、遠藤周作はこのキチジローをみる優しい眼差を神である様に表現している。彼は神が非英雄的人間、弱者を見守っているという事をこの作品を通して訴えたかったに違いない。『沈黙』はキリスト教作家遠藤周作のテーマの一つの区切りをつける意味でかかれたと同時に、神の姿・存在というものをさらに具体化した作品を描く為のプロローグとなっていると言えるのである。

参考資料

粕谷甲一 「『沈黙』について

「世紀」 41年7月号

佐古純一郎 「『沈黙』について

「世紀」 41年7月号

国谷純一郎 「背教と救済」

明治大学論文集

武田友寿 「遠藤周作の世界」

講談社 46年7月発行

広石廉二 解説『遠藤周作のすべて』

講談社 51年11月発行